

多摩大学アジアダイナミズム済州島研修視察 2015

An Activity Report of the Educational Visit to Cheju Island
in Tama University Asia Dynamism Program 2015

趙 佑鎮*	諸橋 正幸*	金 美徳*
石川 晴子*	大森 拓也*	奥山 雅之*
久保田貴文*	武井 徹**	

Woojin CHO	Masayuki MOROHASHI	Mitoku KIM
Haruko Ishikawa	Takuya OMORI	Masayuki OKUYAMA
Takahumi KUBOTA	Toru TAKEI	

1. 研修の目的

現代の産業界が最高学府である大学に望むものは、時代の課題をビジネスの現場で解決できる問題解決力をもった人材の育成と、アジア・ユーラシアダイナミズムというパラダイム転換の時代を創造する志や、「地政学的知」を身に付けた人材の育成である。また、多摩大学の基本理念の一つに「国際性」がある。これら大学に課せられた使命から多摩大アジアダイナミズム韓国済州島研修として隣国である韓国において、世界の 70 カ国 5000 人が集った「済州平和フォーラム 2015」(5 月 20 日(水)～23 日(土)、会場・宿舎 Haevichi hotel & resort)に参加した。済州島で 3 年連続実施しているこのアジアダイナミズム研修は、今回において、地元機関である済州平和研究所等の協力を得て、アクティブラーニングの一環として国立済州大学との学生交流会を開催したことが特徴でもある。

下記 2015 年研修視察の成果と反省点をもとに、11 月 26 日(木)に行われた済州平和フォーラム事務局との来年度実施協議においては、韓国側(済州平和研究所、人間開発研究院、地元大学)と本学のより一層の協力方案が話し合われた。ゴルバチョフ元ソ連大統領やアジア諸国指導者及びドイツのシーメンス社長、アメリカのテスラー社 C T O 等の参加が決定している 2016 年の済州平和フォーラムでの、本学学生の積極的な参加と学びを期待するものである。

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

** 多摩大学経営情報学部 学生課 Student Affairs Division, School of Management and Information Sciences, Tama University

2. 研修日程及び内容

(第1日目 5月20日(水))

- 15:30～17:00 中央日報のセッションに参加。テーマは『グローバル5か国青年会議：世代間衝突と解決案』
- 17:20～18:40 人間開発研究院・多摩大学のセッションに参加。テーマ『企業のグローバル経済協力と平和的アジア交流の道』
- 19:00～20:20 済州フォーラム組織委員長主催による晚餐会に参加。多摩大学訪問団及び日本経営者訪問団がテーブルを囲み食事を取った。
- 20:40～22:00 チャン・マンギ人間開発研究院会長、福田康夫元首相を囲む日本訪問団親睦交流会参加。交流会後記念撮影。

(第2日目 5月21日(木))

- 9:00～10:00 特別講演 シュレーダ前ドイツ首相特別講演に参加。テーマ『ドイツ統一以降の構造改革と朝鮮半島統一の成功条件』
- 10:20～11:40 シュレーダ前ドイツ首相、ユドヨノ前インドネシア大統領、福田康夫元日本首相、ハワード前オーストラリア首相、リ・シャオリン中国人民友好協会会長による演説
- 10:50～13:00 上記メンバーによる世界リーダーセッションに参加。テーマ『信頼と和合の新しいアジアに向けて』
- 13:50～15:10 公益資本主義推進協議会・倫理研究所・東京都倫理法人会のセッションに参加。テーマ『21世紀の資本主義と経営の在り方をアジアから世界へ』
- 15:40～17:00 フリドリヒナウマン財団のセッションに参加。テーマ『自由市場と環境保護主義：二つの両立』
- 17:20～18:40 済州国際自由都市開発センターのセッションに参加。テーマ『日中韓済州国際自由都市推進戦略』
- 19:00～20:20 日中韓経営者晚餐会に参加

(第3日目 5月22日(金))

- 9:00～10:00 IT経営者の創造経済対談に参加。テーマ『何が世の中をリードするのか?』
- 10:10～11:30 人間開発研究院のセッションに参加。テーマ『G2時代のアジアと日中韓経済協力の課題』
- 10:40～15:40 東北アジア歴史財団のセッションに参加。テーマ『東北アジアの歴史和解と平和共同体の先決課題(1)(2)』
- 17:20～18:40 済州大学・多摩大学の学生交流会に参加

「済州大学・多摩大学との学生交流会」

- ・参加者構成:多摩大学(学部生27人、大学院生1人、教職員9人)、済州大学(学部生22人、助教1人、通訳翻訳大学院生4人、教員8人)
- ・司会進行: 趙佑鎮教授、開会挨拶: キム・ナンヒ済州大学日語日文学科長・教授

第1部 学生個人発表（約30分、発表方法：パワーポイント）

内容① 日韓若者事情紹介／日韓大学生の1日の日課比較（各8分～9分）

多摩大生と済州大学日語日文学部生が、両国大学生の遊び、就職、恋愛、ファッション、アルバイト等について簡略に紹介比較

内容② 日韓関係とアジアの現在と未来（8分～9分）

日韓の若者はお互いをどう思っているか、そして、日韓関係やアジアの未来はどうあるべきかを、日韓学生各々が発表紹介。

第2部 グループワーク（日韓学生混合の5チーム（1チーム約10人に分けて、各チームで教員あるいは通訳大学院生が司会通訳））（約30分）

内容① 紹介：両大学が各々を代表して学部、学生を簡略に紹介（5分）

内容② 親善ゲーム：日韓文化に関する○×クイズを済州大学が準備（15分）

内容③ グループ別ディスカッション：第1部の日韓関係の現在と未来をたたき台に、意見交換し、最後に質問用紙を作成（15分）

第3部 全体ディスカッション（20分）・総括

済州フォーラムのテーマに関連して、「日韓関係とアジアダイナミズム」をテーマに教員も交えての議論。テーマが膨大なだけに、第2部で作成した質問紙をもとに進める。

・総括辞 諸橋正幸 多摩大学訪問団長・教授

19:00～20:20 済州大学教職員・学生と夕食



3. 研修視察の成果—学生感想文から抜粋

（3年生）「初の海外で、最初は不安と期待が入り混じっていましたが、無事に終わることができ安心しました。印象に残っているのは、英語が飛び交う様々な大学生の発表に参加させていただいたことです。そこで知り合った海外の学生とも交流でき、facebookも交換することができました。多摩大生との交流会での福田元首相の言葉で印象に残ったのは、「政治が悪いとなると相手も悪くなる。誰が悪いではなく、みんなで政治を支えていく必要がある。これからの国を作るのは若い人。どんな世界がいいか考えながら生きていってほしい。」でした。

（3年生）去年も学ぶことが多かったが、今年もそれ以上に学びました。私たちの世代にできることは何なのかとても深く考えさせられる経験だと思いました。全体を通して学んだことは積極的に自分を出しにいくことです。私は消極的な性格です。去年も参加しましたが緊張して自分を出さずに終わってしまいました。それがとても悔しく今年は名刺を作り自分がどれだけ

話しにいけるか、積極的にいける切っ掛けになりたいと想いを持ち参加しました。結果としては11名の外国人と交流することができました。改めて留学についての想いも強くなりました。(2年生) 私は今まで「観光＝遊び」というように捉えていたが、今回の観光視察で「観光は学び」と考えるようになった。行く場所を事前に調べて、実際に現地に行き、体験をする。これは、学校とはまた違う勉強である。自分の五感を最大限活用して本物を見て聞いて感じることも勉強だと強く感じた。また、英語をできるようにしたいと今回は本気で思った。あの時の伝えられないもどかしさは未だに残っている。

(3年生) 外交官セッションは全部英語だったので聞き取るのが困難でしたが、駐韓米国大使館のリポート大使と写真が撮れて最高でした。また、済州大学の生徒の方々と交流できたのが一番大きな刺激になりました。韓国と日本は違いもたくさんあり、自分自身まだ日本のことも知らないのが多いと痛感しました。最終日の夕飯など豪華で大変な贅沢ができ満足でした。国際交流の大切さと、多摩大学生活でまた何かを企画して形に残せるきっかけにしたいと思います。済州大学の学生と交流して、韓国人の勉強の意欲度が高いことに驚きました。

(2年生) 日本のマスコミ報道を見ていて日韓関係が悪いと思っていましたが、話を聞いていると韓国に1番投資をしているのが日本であり、日中韓が分かり合えばさらなる技術発展で、莫大なビジネス創造になると思いました。私は、もっと韓国語も勉強をし、来年も参加したいです。

(3年生) 現地の学生とも仲良くなりメル友になることもできた。仲良くなった済州大学の彼は、私たちが日本へ帰国する日に空港まで見送りにきてくれて、感動した。タクシーで30分とばしてきてくれたのである。彼が来日した際には、私も空港まで迎えに行こうと心に誓った。済州大学との交流会は多くのことを学ばせてもらい、今後に必ず活かされることであろう。

(1年生) よかったことは、ホテルの部屋が広く景色もきれいでフォーラムの後はとてもリラックスして過ごせたことと、各国の元首相の方たちの話を聞けたことです。反省点は、時間に余裕を持たずに行動することが多くあり、講演の始めのメモがしっかり取れなかったことです。

(3年生) 今回、済州フォーラムに参加して、非常に満足した結果を得ることができました。今後の世界・アジアの平和と繁栄について各国の元首相などが講演、討議する場に学生として参加するということはとても貴重な体験であり、今後の自分のことについてより深く考えるきっかけにもなりました。このフォーラムを通して学んだこと、感じたことが3つあります。

1つ目は語学力の重要性です。国際フォーラムということで様々な言語を耳にしました。しかし世界共通語として英語の頻度がとても高かったです。英語は中高と多少なりと勉強してきたので大丈夫かなと思ったのですがまったく通用しなくて非力さを悔やみました。これからさらに英語を学ぼうと思いました。

2つ目は、政治に関する知識です。これからのアジアに関しての講演や討議が多く、その中でも政治的な話も多く出てきて、日中関係や日韓関係など、なぜ今仲が悪いのか、それには歴史的政治的背景があったからなのです。かつてどんな関係だったのか、歴史の教科書には載っていないことも多くあり、相互の納得のいく歴史認識が必要だと思いました。

3つ目はメディアであれだけ反日と騒がれているが、実際に韓国人や中国人の方と交流するとそんな意識は全くといってよいほどなかったことです。韓国の社会人の方にとっても良くしてもらいフェイスブックで繋がったりして、とてもいい関係を築けたりしたので、反日で騒いでいるのは少数なのではないかと思いました。自分の中でも大きく意識が変わり、来年にでも1年間留学に行きたいと思っています。

済州大学の学生との交流会が一番緊張しました。日本の若者事情をプレゼンするという役目があったからです。プレゼンの内容の充実に加えて、趙先生から笑いを取りに行くという課題も課せられたからです。しかしとても楽しくプレゼンできたと思います。笑いも多少なりとも取れたと自負しています。しかし交流会が終わってからゼミで反省会をしたときに、今後の自分の課題も沢山見えてきました。

互いの大学のプレゼンが終わり、グループディスカッションになったときが一番盛り上がりました。人見知りをする学生がおらず、済州大学の学生さんの日本語力も予想よりレベルが高く、円滑に話し合いが進み、いろいろな話題で盛り上がりました。とても楽しく有意義な時間を過ごすことができ、このような場を今後も後輩たちにつなげていけたら良いと思います。



4. 結びに代えて～教職員の総括

教職員は今後の教育活動及びアジア観について諸々の示唆を得た。以下においては、研修に参加した教職員の各々の総括や注目すべきセッションに関する感想を記す。

4.1 金美德教授（教務委員長）

今回のフォーラムは、58のセッションで外交・安保、経済・経営、環境・気候変動、女性・文化・教育などについて報告や議論が行われ、浮き彫りになった課題は、地政学的知（ジオポリティカル）、新しい北東アジア、日中韓の信頼回復、朝鮮半島の統一、北朝鮮の未来、シルクロード経済圏などである。

印象に残った発言を3点紹介する。一つ目は、韓国外交部第2次官の趙兌烈（チョ・テヨル）氏は、「南北関係改善の大きなチャンス・統一気運は、20年に1回ある。たとえば1970年、1990年、2010年であった。このサイクルで行けば次は2030年ということになる」と述べた。ただ、一方で韓国人の専門家たちの議論では、3年後、いや5年後に統一するとの意見もあった。二つ目は、駐韓ドイツ大使のマファエル氏は、「6カ国協議のメンバー、すなわち米国・中国・日本・ロシア・韓国は、ピョンヤンに同じメッセージを送るべきだ」と述べた。この発言でセッシ

ンが締め括られたので大変印象に残った。因みにマファエル氏は、韓国で「統一伝導師」という評価を得ている人物であり、これまでも以下のような発言で注目を浴びている。「韓国はドイツより準備をうまくできるはず」、「ドイツのように通信・郵便・旅行など人的・物的交流を拡大し、徐々に内部の国境をなくしていくことが重要だ。韓半島信頼プロセスが成果を上げ、段階的に統合が進むことを期待する」など。三つ目は、駐韓アメリカ大使のリッパート氏は、「3つの方法論でリバランス戦略・アジア戦略を継続する」と述べた。3つの方法論とは、「同盟強化」、「新興国パートナーとの対話」、「多国間アプローチ」である。

学生は、今回の研修を通じて、朝鮮半島をはじめとするアジア・ユーラシアの風を浴びた。これは、言い換えれば新たに迎えようとする時代と向き合ったと言える。新たな時代には、チャンスもあればリスクもあるが、真正面から向き合い葛藤する中で自らのアイデンティティを探し求めることができるのではなかろうか。「教育とは、何か」。その答えには、数多くの学説や経験知があるが、あえて一つを挙げるならば「親の背を見せること」、すなわち「教員の背を見せること」が重要と考える。したがって多摩大学では、今後とも教職員が「アジア・ユーラシアダイナミズム時代を創造する志」を持って時代と向き合い、時代と戦う姿を見せる教育・研究活動を行っていく所存である。

4.2 諸橋正幸教授（研究開発研究院長・多摩大研修訪問団代表）

多摩大学としての参加は3回目であるが、フォーラム自体は10回目の節目にあたっており、近年の日中韓の軋轢を背景にした東アジアの政治問題を真正面から取り上げた基調講演やセッションが増え、招待講演にも、外交官・政治家が目立つフォーラムとなっていた。

フォーラムに対する多摩大の参加・関与度合いも年々進化している。「様々なセッションに聴衆として参加して国際会議の雰囲気を知る」（初年度）という段階から、「各国の学生たちとラウンドテーブルで意見交換をする」（2年目）段階へと進み、今回は「日韓の学生による文化活動に関する発表とワークショップ」という、より緊密で長時間の議論が実現した。

政治の世界における各国の公式スタンスとその背後に見える戦略を学ぶ表のセッションの他に、身近な文化の多様性・共通性の発見を通じた、若者の生活に根付く直観的理解を基に東アジア近隣諸国との新たな交流の可能性を見出すきっかけとして、このフォーラム参加が役立っていることを改めて実感した。今回初めての試みであるワークショップでは、日韓の学生同士のメールアドレス交換も行われており、一時的な交流ではなく、より長い交流も期待される。

4.3 石川晴子准教授（学生委員会委員）

今年10周年を迎える済州フォーラムへ昨年度に引き続き参加し、今回も各国の政財界、学術界における数々の著名人の話をじかに聞き、現在のアジアの平和と繁栄へ向けての問題点を認識し、問題解決のためのアプローチについて知ることができた。学生にとっては、セッションや次世代リーダー交流会会議、済州大学との大学生交流を通して、積極的に発言をする他国の同世代の学生の存在をはじめ、海外での体験が大いに刺激となったようであるし、またネットワーク作りにも役立ったようだ。最終日の観光では済州島の歴史や文化について学び、自然や土地の食事を味わうこともできた。私たちが韓国に持つイメージはメディアに左右されがちだが、実際に国へ行き、人とふれあってみなければわからないことも多い。今後の日韓関係のキーとなる若者世代の交流という点においても、今回の研修における成果は大いにあったと感

じた。教員としては、研修を通して見聞を広めることができたこと、参加学生とじっくり向き合って話をすることができたこと、教職員同士交流を深めることができたことが成果であった。

4.4 奥山雅之准教授（地域活性化マネジメントセンター副委員長）

中国の台頭、それに伴う米国の対中関係重視により、米中共同の取り組みを重視する、いわゆる G2 (Group of Two) 時代に入ろうとしている。こうしたことを踏まえ、今後、日中韓の経済協力はどうあるべきか、課題は何かについて、LANCY 会長である SHEN 氏がアパレル分野を例にとり、登壇してコメントした。LANCY は中国の婦人向けアパレル大手であり、北京とソウルにデザインセンターを構え、アジア固有のファッションブランドを確立しようとしている。韓国の子供服大手の Agabang にも出資している。まさに、韓国のデザイン力を中国市場に活かすような「最適立地」によるグローバルビジネスを展開している事例といえよう。

LANCY 会長が強調していたのは、省によってもビジネス慣習が異なる中国でのビジネスで儲けを出すことの難しさであった。こうした中、彼が今後の最適解の一つとして提示したのは、「日本のものづくりの技術力と韓国の情報技術によって中国人向けブランドを開発し、中国内ビジネスは中国人のパートナーが行う」というものである。加えて、「中国を母親の目で観察することが重要だ」と指摘する。なぜなら、母親の目を見て嘘はつけないからだという。中国ビジネスでは様々な問題が起こるが、「ごまかされない」洞察力が特に必要という意味であろうか。

このセッションにより再確認できたのは、21 世紀のグローバルビジネスにおいては、単独企業あるいは単独国の企業連合のみで対処することは困難であり、戦略的行動や商慣習の不透明さはありながらも、異国間の企業の連携が重要となることであった。こうした意味で、政治分野での停滞に足を引っ張られることなく、経済分野での相互連携は、より一層積極化していかなければならない。

4.5 大森拓哉教授（学生委員会委員長）

昨年に続き、この国際フォーラムへは二度目の参加となった。今回のゲストスピーカーも大物ぞろいで、各国の元首脳クラスを目の前で見られただけでも貴重な経験である。しかし学生たちは物怖じもせず、時には一緒に写真に納まってもらうお願いをするなど、堂々とした振る舞いであった。また、今回は多摩大生が現地の大学生と交流するセッションが複数回あり、急遽設けられた場であっても積極的に参加・交流する姿が見られ、大変頼もしく感じられた。早速その場で SNS による交流が始まるなど、現代的な手段でのコミュニケーションには若者の潜在力が見受けられた。現地で働く若者と交流を持った多摩大生もあり、公式な場でないところでの積極的コミュニケーション活動にも感心させられた。

タイトなスケジュールの中で、学生間交流、各種セッション、異文化体験等、学生にとっても参加教職員にとっても大変有意義な海外研修であった。これ以上のイベント追加はかなり不可能に近いと思われるが、日本からの参加社会人と多摩大生との密な交流会、複数国の大学生同士の交流セッションなどの機会がさらに増加されると、よりいっそう贅沢な研修となることであろう。

4.6 久保田貴文准教授（地域活性化マネジメントセンター委員）

済州平和フォーラム 2015 に参加して、2つ非常に興味深かったセッションについて述べる。1つ目は、「Talk on Creative Economy : What is It That Leads the World?」で今ひとつは多摩大学と済州大学校との学生間の交流セッションである。1つ目のセッションの発表者は、LEE Sirgoo 氏（Co-CEO, Daum Kakao Corp.）および LI Ya 氏（CEO, Phoenix New Media, China）であった。前者は、スマートフォンのアプリケーション「カカオトーク」を手がけている会社の CEO、後者は香港のメディアであるフェニックスの CEO であり、アジア経済における諸リーダーの講演およびパネルディスカッションであった。非常に興味深かった質問として、「IT からどう未来が変わるのか」という質問に対して、LEE 氏は「超連結社会がはじまり、物理距離・世代格差が縮まる。」旨の内容を、LI 氏は「10 万匹の鶏の重量を、IoT を用いて測るという、ビッグデータと IoT からの展開」について紹介していたのが印象的であった。

2つ目の交流セッションでは、お互いの大学の学生がそれぞれ作成した資料をもとにプレゼンを行い、その後にグループに分かれて議論がなされた。大学の中で展開されている授業などの他に、授業以外での文化的な内容や生活面の紹介など学生ならではの視点で非常に密な交流がなされ、現地の学生は、みかん畑やカジノでアルバイトをしていることが分かった。以上より、本研修では、教員の研究に対する情報収集・議論はもとより、学生のセッションの中での成長や異文化間におけるコミュニケーション力の向上にも寄与しており非常に有効な機会となった。

4.7 武井徹（学生課主任）

激動する現代社会においてグローバルな視野で物事を考えることができる「グローバル人材の育成」は各大学の課題である。多摩大学においても留学プログラムの充実を図るとともに、教職員が引率する海外研修を積極的に実施するなどし、この課題に取り組んでいる。

今回の多摩大アジアダイナミズム韓国済州島研修は、学生にとって国の政治経済をけん引する政治家やビジネスパーソンの講演を聞き、語学力を試しただけではなく、異文化に触れたことで新たな視点で物事を考える切掛けを与えた。また、アクティブラーニングの一環として実施した国立済州大学学生との交流会では、日本語を学んでいる韓国人学生から韓国人の学生生活、日本に対する歴史認識、並びに韓国の厳しい就職事情等を知ることができた。韓国人学生が質問をする他、参加者と積極的にコミュニケーションをとっていた一方で、多くの多摩大生にはこの積極性があまりなかったのは残念であった。しかし彼らにとっては世界で通用するグローバル人材には積極性が必要であることを理解したことだけでも収穫であり、非常に良い刺激になったであろう。

4.8 趙佑鎮教授（国際交流委員会副委員長）

今回の研修視察も、学園を始め、寺島実郎学長、久恒恒一副学長以下教職員の方々に多大なご支援をいただいた。また、御多忙の福田康夫元首相と行徳哲男先生（日本 BE 研究所長）及び日本経営者の方々には、学生にとって大事な思い出になる懇談会を受け入れていただいた。この場を借りて、研修視察に参加した教職員・学生諸君を代表して心より深く御礼申し上げたい。

今回の研修視察で新たに取り入れた、アクティブラーニングの一環としての学生交流会等は、去年参加した教職員からのフィードバックと支援により生まれたものであり、企画担当として今後とも韓国側関係者を含め皆様の意見を傾聴しながら、さらに充実した教育実践プログラムに進化させていく所存である。